



第42回「おかねの作文」コンクール

おかねの重み

鹿児島県・鹿児島市立鹿児島玉龍中学校 2年 清水 理沙

おかねは、あればあるほどその使い道は多様で、使うことにより、ときに満足感を得ることができます。「もっと、おかねがあれば——」と考えたことのある人は、ほとんどではないでしょうか。

昔のように、数十円を手に握りしめ、駄菓子屋に向かう子供の姿は、今はもうありません。携帯電話・音楽プレーヤー・パソコンなど、最新のものがあふれている現代。そんな今を生きる子供たちは最近、働きもしないのに少しおかねを使いすぎているのではないかと、思ったことがあります。しかし、わたしもその中の一人でした。

毎月、祖父母から送られてくる1,000円。届いたらすぐに、雑誌やマンガ、遊びなどに使ってしまう。ときには、もう少しおかねの量を、増やしてくれてもいいのにと感じてしまうことだってあります。そのときはまだ、祖父母から送られてくる1,000円の重みを、知らなかったのです。

わたしは、夏休みに祖父母の家を訪れました。何年も住み続けている古い家、野菜やスイカがたくさんなっている畑、田舎らしい新鮮な空気、豊かな自然……。変わっていない風景を懐かしく感じながら、ただのんびりと過ごしていました。

そんなある日、わたしは祖父の畑仕事についていくことになりました。木が生い茂っている道を歩き、畑へ向かい、祖父は黙々と稲刈りを始めました。人手のない農作業は、機械を使っての作業です。手伝えることがないので、わたしはただ、祖父の作業を見ているだけでした。辺りは静かで、ただ聞こえるのは、コンバインの動く音と、せみたちの鳴き声だけでした。夏の太陽が照りつける中、その作業は何時間にも及びました。そして帰り際に、祖父はわたしにこう言いました。

「米は台風や気候の影響を受けるから、収穫するのは大変なんだよ。」

と。長い時間をかけて、丈夫な稲を育てることは、決して容易なことではないと祖父は言います。それなのに、収穫したお米は、そんなに高くは売れないのです。

そして、祖父母の生活はとても質素なものでした。三食とも、ご飯とみそ汁とちょっとしたおかずのみ。おいしいものを食べるわけでもなく、着たい服を買うわけでもなく、便利な道具を買うわけでもありませんでした。それなのに、わたしたちが帰ったときにはいつも、おいしいお店に連れていってくれたり、ほしいものを買ってくれたりしてくれます。毎月送られてくる1,000円にも、たくさんの思いが込められていることに気づかされました。

そして何より、そんな祖父母の努力によって送られてくる1,000円の重みを知らなかった自分を恥ずかしく思いました。何時間、あるいは何日も、働き続けてやっと手に入れたおかね。しかし、それをただ自分だけ満足できるような使い方をするのではなく、^{ほか}他の人の幸福のために使っていたのです。

おかねの裏にかくされた努力。それは、決して祖父母だけではありません。父も家族のために、休むことなく働き続けているのです。

最近忘れかけていたおかねの重みを、この夏に改めて感じることができました。

そして、また今月も送られてきた1,000円。いつものわたしだったら、すぐに使い果たしてしまっていたでしょう。しかし今回は、その1,000円に対する見方が変わり、祖父の働く姿を想像すると、なかなか簡単に使えるものではありませんでした。でも決して、自分の好きなことに、おかねを使ってはいけないということではないのです。おかねを使ったことによって得られる何かがあるはず。それも一つの、おかねの有意義な使い方なのではないでしょうか。しかしその中で、おかねを自分の夢への実現、今何か夢中になっていることに使うことも大切です。そして何より、忘れてならないのが、そのおかねを稼いでくれた人への、感謝の思いを持つことだとわたしは思います。そうすることで、自然とおかねの有効的な使い方が身についていくのではないのでしょうか。

わたしは将来、だれかのために一生懸命働くことのできる、やりがいのある職業につきたいと思っています。そして、いつまでたっても忘れないようにしたいです。おかねの重みを。

